

幼稚園における栽培活動を通して育まれるもの

林 美代・齊 藤 佳子・秋 山 千 晃・渡 辺 愛 華・原 田 詩 織
田 川 実 果・平 尾 美 香・廣 瀬 三 枝 子

1. 研究の目的

幼児教育は「環境を通して行う教育」が基本とされ、子どもの自発的な活動としての遊びが中心となって展開される。これは、小学校以降の学校教育で展開される教科等の学習の基盤を担うものとして重要である。子どもは、自発的な活動である遊びの中で自然に働きかけ、感性を働かせてそのよさや美しさを感じ取ったり不思議さに気付いたりすることを通して資質・能力を育んだり、感じたりできるようになったことを使いながら、試したりいろいろな方法を工夫したりすることによって自然と新たな関係性を築いていくといわれる¹⁾。これらのことは、「自然との関わり」として幼児期においても大切にされてきたが、今回「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として以下のように示されることとなった。

自然との関わり・生命尊重²⁾

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることをもちて関わるようになる。

身近な動植物は、子どもにとって命を学ぶ機会であるだけでなく、動植物に触れ合う体験は幼児の心を豊かにするし、植物栽培や飼育活動は命あるものをいたわろうとする気持ちを育む。そのため、直接動植物に触れ合う活動は、子どもの生命観を豊かにし、生物を愛護しようとする態度の育成につながると考えられている³⁾。それらの直接的な体験を通して豊かな心や思考力の芽生えを育み、小学校における学びへとスムーズに移行させていくことが求められているのである。

また、幼児期における教育内容の中でも栽培活動は重要な役割を担っている。栽培活動は、日常的に自然に触れ親しむことができ、身近な自然環境に関わることができる活動として、また当番活動や協同の活動を通して自然環境に慣れ親しむ中で周りの人々と発見や感動、驚きなどを共有することができる活動であり、子どもたちの健やかな成長発達につながる重要で意味のあるものと捉えられている⁴⁾。また、実際に栽培活動などを行っている様々なアクシデントに見舞われ、それを乗り切ろうと試行錯誤を行う。そこで初めて物事はなかなか思い通りにいかないことや生きていることのありがたさ、生命の尊さを実感するといわれる⁵⁾。この体験を通して様々なことを考え、「生きる力」が育まれていくと考えられる。

このように、幼児期における豊かな自然との関わり、とりわけ栽培活動はその後の人間の成長過程において重要な役割を果たすことが分かる。そこで本稿では、本学附属幼稚園において取り組んだ栽培活動を通して、子どもたちはどのような学びを体験するのか、また教師はどのような援助が必要かということについて事例をもとに考察を加えることにした。

平成31年1月7日受理
連絡先 〒769-0201 香川県綾歌郡宇多津町浜一番丁10番地
香川短期大学 子ども学科
TEL 0877(49)8049 FAX 0877(49)5252
Email hayashi@kjc.ac.jp

2. 研究の経緯

(1) 本学附属幼稚園との打ち合わせ

2018年4月5日、本学附属幼稚園にて研究テーマ「幼稚園における栽培活動の展開」について打ち合わせを行った。研究への協力要請と研究対象、研究方法、活動期間、活動内容、子どもの様子（子どもの会話や行動の観察・記録）について説明をし、承諾を得た。

1) 研究対象

香川短期大学附属幼稚園において栽培活動を行う園児（4歳児・5歳児）、担任教師及び活動に関わる園の教職員

2) 活動期間と内容

活動期間は、2018年5月～10月頃まで

活動内容は、土入れ、種蒔きあるいは苗の植え付け、収穫に至る活動

3) 研究方法

- ①栽培活動における幼児の様子を観察・記録する。
- ②子どもの様子を分析する。
- ③活動の影響（効果や問題点など）を考察する。

(2) 担任教師の役割

本研究において担任教師には以下の役割を担ってもらった。

- ①これまでの栽培活動を踏襲し、栽培活動を計画し指導を行う。栽培するものは、4歳児ではアサガオ、5歳児では自分の好きな夏野菜であり、子どもたちはプランターを共有して一人一つずつ育てることとなる。
- ②その時の子どもの様子を観察し、保育者の支援とともに記録用紙に記入する。

3. 年長児における夏野菜栽培

【事例①：夏野菜を買いに（5月8日）】

5歳児は、自分たちで選んだ夏野菜を育てる活動をするようになる。前日はクラスごとに育てたい野菜を調べ発表することで、苗を買いに行く活動に期待を持って降園した。

当日登園した子どもたちは「先生、〇〇に決めたよ」など、嬉しそうに買いたい野菜を伝

えてくる。子どもたちからは、茄子、オクラ、キュウリ、ピーマンなど様々な夏野菜の名前が伝えられる。

買い物が始まると、子どもたちは店内を歩き回りながら自分が育てたい野菜の苗がどこにあるのかを捜し、見つけて喜ぶ。A男はズッキーニを育てたくて苗を探すが見つからない。そこでお店の人に尋ねるように促す。ズッキーニは売られていないとのことだったのでしばらく考えた後、キュウリを育てることにする。

買い物が終わり、帰りのバスの中では子どもたちは苗のにおいをかいだり葉の形をじっくり見たりする。

附属幼稚園では、年長児が毎年夏野菜を育てている。子どもたちは昨年の年長児の様子を直接見ているし、苗を買いに行く前に教師の用意した写真を見るなどして栽培活動を行うことを楽しみにしていたと考えられる。しかし、「野菜が苦手だけど食べられるかな？」と悩んでいる子どもも見られた。その際、教師が「自分たちで育てた野菜ならきっと美味しいよ」と言葉をかけることで子どもの不安が和らいだようである。子どもの様子に合わせて、活動に期待が持てるような言葉かけが重要であることが分かる。



図1 夏野菜探し

また、買い物は社会生活との関わりの深い活動でもある。実際、自分の育てたい野菜を探すために子ども同士での会話が行われ、教え合いが生まれていた。教え合いの中で目的が達成され、子どもたちは満足感を味わうことができたと考えられる。しかし

その教え合いでも育てたい野菜を発見できなかったA男はあきらめきれなかったようだ。そこで教師は店員に相談することを持ちかけた。これにより子どもは自分の目的達成のために地域の人と関わる手段を体験的に学習した。だが、自分の育てたかったズッキーニはその店では売られていなかったため別の野菜を考えなければならなかった。A男はしばらく考えた末に野菜を変更することにした。ここで葛藤を経験し自分の気持ちに折り合いをつける経験をしている。社会生活と関わる中で、子どもが葛藤したり折り合いをつけたり相談したりといった対話が存在するといわれる⁶⁾が、まさにこのような経験が生まれている。



図2 店員さんとのやりとり

この後、園に帰って子どもたちは苗を植える活動に入る。この活動、すなわち自分たちで実際に見て選ぶことは、苗を植えて育てるというこれからの活動に意欲的に取り組むきっかけとなったと思われる。主体的に取り組むための動機づけとしては大きな意味を持つものであったと考えられる。

【事例②：苗の植え付け（5月8日）】

園に帰ってさっそくプランターに植えることになる。中には土で手が汚れることを嫌がったり、苗を植えるために掘った穴が崩れて戸惑ったりする子どももいた。苗がよく育つよう、まずはたっぷり水を含ませること、土のほうにも水をたっぷりしみ込ませることをFさんに教えてもらい、子どもたちと土が水を吸い込む様子を見て水の大切さを感じながら苗を植える。

この活動において、野菜の生育に詳しいFさん（事務）との連携が見られる。野菜の育て方を説明してもらうなど、「地域にいる専門家」としての役割を担ってもらった。教師だけでは伝えきれないようなところを連携することによって補うことができた。また、子どもたちにとっては教師だけではなく園にいる人との関わりを経験することもできた。Kさん（園バスの運転手）は子どもたちが野菜の世話をしていないときにはさりげなく水やりをするなど、野菜の世話をしてくれていた。教師だけでは手が回らないところを援助し、栽培活動を支える人の重要性を感じさせる事例である。

【事例③：花が咲いているよ（5月15日）】

苗を植えた翌日より、子どもたちは園庭へ出たときにプランターを見に行くことにする。土に触れて「乾いているかも」「水やりしなくちゃ」など、乾いた状態かどうかを確かめて苗の水やりをしている。苗が気になって毎日プランターを見に行く子どももいた。

戸外遊びの時間、水やりを兼ねてプランターを見に行ったところ友達の苗に「花が咲いている」と変化に気付いた子どもがいた。もう花が咲いたということに興味を持ったのか、自分のクラスだけでなく隣のクラスの苗も見に行った。何人かの苗に花が咲いていたようで、子どもたち同士で誰の苗に花が咲いているのかを伝え合う。



図3 ミニトマトの花

【事例④：支柱立て（5月22日）】

プランターの様子を見に行った子どもたちが、隣のクラスの苗に支柱が立っていることに気付く。苗も大きく成長していることもあり、支柱を立てることになる。支柱の立て方を知っている子もおり、支柱の立て方が分からない子どもは友達の様子を伺いながら自分の苗に支柱を立てる。



図4 支柱立て

事例③④では、友達同士の関わりを見ることができ。自発的に毎日水やりをする動機として、早く大きくなってほしいという願いはあると思うが、中には地道な世話に飽きてしまう子どももいる。そのような中でお互いに声を掛け合い助け合いながら進めることも必要であろう。お互いに声を掛け合い助け合う中で会話が生まれ、相手の苗にも興味をもっていったのだろう。その中で花が咲いている、支柱が立っているといった変化に気付くことができたのではないだろうか。

特に支柱を立てる活動においては、やり方を知っている子どもを真似る中で教え合いが生まれている。近くで支柱を立てている子どもにも興味を持ち、それを意識して真似るという活動の中で、友達と深くつながっていつている。この活動においては支柱を立てることが目的であり、その目的達成のために対話が生まれ、教え合ったり協力したりする。うまくいかない場合にはいろいろと工夫を試みたりする。グループの中でのこのような活動を通して、どんどんつながっていく。これは、「協同性」へとつながる活動であると考えることができよう。

【事例⑤：ミニトマトの実がない（6月14日）】

プランターを見に行ったところ、ミニトマトの実がちぎられていることに気付く。3歳児が、ミニトマトが熟れているのに気付いてちぎったようだ。事前にプランターが気になってやってくる年少児には「この野菜は年長さんが育てているから気になっても取らないでね」と伝えていたが、気になる気持ちが抑えられなかったらしい。ミニトマトは早くに実をつけたものの、なかなか熟れなかったこともあり、子どもたちはショックを受けているようだ。教師は、子どもの悲しい気持ちに共感し、「緑の実がまだたくさんついているから次は収穫できるよ」など、次への期待を膨らませられるような言葉をかける。

翌日、順調に実を付けていない子どもたちに園用に育てているオクラの収穫を手伝ってもらい、収穫の楽しさが味わえるように配慮する。



図5 オクラの収穫の手伝い

子どもたちは野菜の収穫を楽しみにしていた。しかし、野菜が気になる年少児は触りたい、食べてみたいといった気持ちを抑えることができなかったようだ。収穫を楽しみにしていた年長児は当然悔しい気持ちになるが、気持ちを立て直して次に向かわなければならない。そのため、教師は年少児にちぎられてしまった悔しい気持ちに共感し、気持ちの立て直しに寄り添う必要がある。悔しい思いをしている子どもたちに「緑の実がまだたくさんついているから次は収穫できるよ」など次の収穫を楽しみにできるような言葉をかけることで、気持ちが落ち着けるような配慮をしている。また、収穫の楽しみが実感

できるような配慮として園用のオクラの収穫の手伝いも取り入れ、子どもたちの気持ちの立て直しに配慮している。子どもたちの気持ちに寄り添う配慮が必要であることがよくわかる。

年少児にとってはどうだろうか。ここでは道徳性・規範意識の芽生えに関わる部分がある。これは領域「人間関係」と関連しており、幼児期の終わりまでに育てほしい姿としても示されている。道徳性の芽生えは、「友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる」⁷⁾とされ、また規範意識の芽生えは「きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる」⁸⁾とされている。多くの人々と生活をしていくうえで、他者のことを考えて行動する必要がある。このよう力は集団生活の中で、特に3～5歳の頃に発達するともいわれる。自分の思いが強い場合には、自分の思いを抑えきれないこともあるが、トラブルや葛藤を経験する中で調整できるようになっていく。今回の事例では、年少児にとっては、年長児が育てたミニトマトとの関係がその葛藤を経験する機会となっているだろう。年長の収穫を楽しみにしている気持ちに気づき、自分の触ってみたい、食べてみたいという気持ちを抑える経験を通して道徳性が育っていくだろう。

4. 年中児のアサガオの栽培

5歳児の栽培活動を中心に、子どもたちの学び体験や教師の援助を見てきたが、同じような経験は年中児の活動でも見られた。

【事例⑥：草抜き（5月下旬）】

朝顔の種蒔きをしてから3週間ほど経った。戸外遊びの時間、プランターに草が生えてきたので数名の子どもたちに声をかけて草抜きを始める。それに気付いた子どもたちが「僕もする」「私もする」と寄ってくる。朝顔の芽か草か区別するのが難しい子どももおり、どれが朝顔の芽か考えながら教師と草抜きに取り組む。B男は、

友達のプランターにも草が多く生えていることに気付き、「僕、こっちのプランターするよ」と言って協力しながら草抜きを進めていった。

帰りの集いでそのことを子どもたちに紹介すると、翌日、C子が「先生、袋ちょうだい」とやってくる。何に使うのかと聞いてみると「朝顔の草抜き」をすると答える。子どもたちは、朝顔の世話をする（草抜きをする）ことに関心が向き、それぞれが戸外遊びの時間に自発的に草抜きに取り組むようになる。



図6 朝顔の草抜き（年中）

この事例でも、友達同士の関わりを見ることができ、初め教師が気付いて数人の子どもたちと始めたプランターの草抜きであったが、友達の姿に興味を持った子どもたちがやってきて活動が広がっていった。このような活動は、教師が気付いて始めなければ子どもたちは気付かないかもしれないし、集中力もたないかもしれない。朝顔の種蒔きをし、芽が出て花が咲くまでの過程は子どもにとって長く、興味・関心も薄れる可能性がある。そのような中で教師が朝顔の世話をする（草抜きをする）姿を見せることで、子どもたちは再度朝顔に興味・関心を持つようになったのではないだろうか。お互いに声を掛け、助け合いながら進めることが重要であり、その橋渡し役として教師の支援が重要になるだろう。

また、その活動を帰りの集いで伝えることで、翌日子どもたちが自発的に動くようになったと考えることもできる。草抜きのことを帰りの集いで紹介す

ることで前日は遊びに集中していた子どもたちが、栽培活動に関連する活動に気付いていききっかけとなっており、活動への動機づけを行うことも教師の役割として重要である。

【事例⑦：年少児との草抜き（5月下旬）】

D子と教師で草抜きをしていると、3歳児が数名「何してるの?」と寄ってくる。プランターの草抜きをしていることが分ると、手伝いをしてもらえることになる。しかし、3歳児はプランターを綺麗にすることに興味を持っていたのか、朝顔の芽も抜こうとする。それに気付いたD子が、「それは抜いたらダメだよ」「これを抜いて」など、どれが草かを伝えながら草抜きを進める。そのうちにスーパーの袋が一杯になり、嬉しそうに教師に見せに行った。



図7 朝顔の草抜き（年少児も加わって）

この事例では、草抜きを通して異年齢交流が生まれていることが見て取れる。3歳児がしたいと思ったことを、4歳児の様子を見ながらあるいは教えてもらいながら実現しているのが分かる。4歳児のD子にとっては、年少児と関わり、教えるという経験をすることでお姉さんとしての自覚・自信になったのではないだろうか。また、3歳児にとっては、次年度から始まる栽培活動にあこがれや興味を持てるような交流となったのではないか。

5. まとめ

栽培活動は、領域「環境」に関連する活動である。しかし、実際に栽培活動を行う中で子どもたちは様々な経験をしている。

一人で活動をしているわけではないので、子ども同士の教え合いや協力が見られる。それはクラスの子どもたちだけではなく隣のクラスの子ども、さらには異年齢の子どもまで広がっている。ここから人間関係の広がりを経験していることが読み取れる。

また、地域の人と関わる手段を体験的に学習する機会も活動の中から読み取ることができた。社会の中で生活しているということを実感し、その生活の仕方を考えるきっかけとなったと思われる。園内においても、教師だけではなくFさん（事務）やKさん（園バスの運転手）との関わりもあり、様々な人間関係を体験することができたのではないだろうか。

さらに活動の中で、栽培活動に関わった子どもたちが様々な形で葛藤やトラブルを経験した。同じような体験ではなかったが、それぞれが課題に直面し、それを乗り越える経験を通して成長していったのではないだろうか。

幼児教育における学びは、総合的で体験的な活動を通して生まれる。栽培活動を通して子どもたちは様々なことを体験し、小学校以降の学習へとつながっていくことが分かる。またこれは領域「環境」における活動ではあったが、上述のように領域「人間関係」に関連する部分が多くなり見られたことから、この活動は総合的な活動であったと考えられる。

教師の支援の観点からは、教師は子どもの気持ちに寄り添いながら言葉をかけていることも確認できた。子どもの興味・関心の維持のためには、時に教師以外の人たちとの連携も行っていることが改めて示されたことから、職員間連携の重要性も見取れた。「保育・教育活動は、担任一人で行っているものではない」ということを痛感できた。

今後はさらに栽培活動の様子を記録し、子どもたちの学びの過程や教師の支援についての研究を深めていきたい。

注

- 1) 日置光久 (2016) 「自然と関わり, 感性や思考力を育成する幼児期の教育」文部科学省『初等教育資料』947, p.97
- 2) 文部科学省 (2017) 『幼稚園教育要領』フレール館, p.7
- 3) 前掲書1), p.99
- 4) 長谷秀揮 (2017) 「子どもの生活と保育内容「環境」とのつながりについての一考察—幼児の園での生活と遊びから“生活科”も視野に入れて—」『四条畷学園短期大学紀要』第50号, p.25
- 5) 藤田智子 (2013) 「野菜栽培を通じた, 幼児の発達に関する事例研究」『人間生活学研究』第4号, p.27
- 6) 無藤隆編 (2018) 『「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)と重要事項(プラス5)を見える化! 10の姿プラス5・実践解説書』ひかりのくにp.38
- 7) 前掲書2), p.6
- 8) 同上